

# データからみる『論語』

崎原麗霞\*

## 一. はじめに

2024年に発行予定の新1万円札の肖像に渋沢栄一が採用されている。明治・大正期に活躍した実業家として、銀行、鉄道、紡績会社等約500の企業設立に携わり、「日本資本主義の父」とも呼ばれる渋沢栄一の生涯を描いたNHK大河ドラマ「青天を衝け」も放送開始後、高視聴率を獲得している。その背景として、渋沢談話録『論語と算盤』に、道徳を重視している経営思想が盛り込まれ、持続可能な開発目標に通じる企業経営のあるべき姿勢が、現代社会において再び共感を呼び起こしているのではないかと考えられる。また、日本経済の礎を築いた渋沢栄一の教えは、この2年間コロナ禍の影響により、経済・社会情勢の不透明さが増している現代を生きるヒントになるはずだと、日本各地でイベントが相次ぎ企画されている。

鳥取県では、経営の基本・原点をあらためて認識し、社会や経営にどう活かしていくのかを考える機会とするため、鳥取商工会議所が主催する「渋沢栄一・論語と算盤塾」が開講され、渋沢が愛読した古代中国の書物の『論語』について、筆者が2回にわたり、その時代背景や成立した経緯及び『論語』から読み取れた情報等々を紹介するチャンスに恵まれたため、その内容を本稿にまとめた次第である。また、『論語』が成立した時代背景、孔子の生涯及び孔子を始祖とする儒教については、優れた先行研究からの拝借が多いが、『論語』にみる孔子の発話、弟子たちの発話の数ほどになっているのか、さらにそこから読みとれた情報に関する考察が、本稿の焦点である。

## 二. 孔子と『論語』

### 1. 『論語』が生まれた時代背景

『論語』は今から約2500年前、中国の春秋時代の末に書かれた書物として知られている。春秋・戦国時代は、紀元前770年に周王朝が東西に分裂してから、秦の始皇帝が中国を統一する紀元前221年までの、およそ550年の期間をさす。その時代の魅力は「諸子百家、百家争鳴」が定番となる。「諸子百家」は、春秋・戦国時代の学者や学派の総称となり、「子」は先生の尊称である。

「諸子百家」は、政治のあり方や乱れた世の中に対処するための処世術などを説きながら諸国を遊説していた。優秀な人材が敵国に流れないように、諸侯たちは思想家のために立派な邸宅を用意したり従者をつけたりして、歓待したと伝えられている。

「諸子百家」には、孔子が代表とする仁愛を説きながら血縁重視する「儒家」；墨子が代表とする、儒教の仁愛は血のつながりを重視する差別愛だと批判して、差別がない兼愛主義（博愛）を主張する「墨家」；老荘思想とも呼ばれる老子と荘子；老子は、儒教を人工的な世界だと否定し、自然世界を重視し礼を捨てる「無為自然」を説いた。その他、儒家の徳治主義を批判し、法治主義を説く韓非子が代表となる「法家」；神農という本尊を立て皆農主義を説き、自らも農耕を実践する集団の「農家」などが数えられる。このように、「諸子百家」が「百家争鳴」という形を取り、自

---

\* 鳥取大学 教育支援・国際交流推進機構 教養教育センター 准教授

由に各自の思想を語っていたが、その時代を最初に切り拓いたのは孔子を祖とする儒家であったといわれている<sup>1</sup>。

## 2. 孔子に始まる儒教（儒学）の起源

儒教（儒学）の母胎となる、漢字「儒」の意味合いを中国最古の部首別字典『説文解字』（文字学の古典）では、「儒」を「術士の称」と、解釈している<sup>2</sup>。「儒」は、専門的技能や技術（呪術）を持つ人、つまり、神と人をつなぐ（神がかり）、神や霊の言葉を述べる人の称である。その流れは、王朝の祭祀儀礼・古伝承の記録担当（知識系上層）と祈祷や葬祭を担当する（シャーマン系下層）に分けられるという<sup>3</sup>。孔子の母親は祈祷師だった。幼児期の孔子は俎豆（占い）の遊びをしていたと記録されている。儒のシャーマンニズムに仏教から由来する「孝」という概念を入れ、家族理論、さらにその上、政治理論を編み出す。これが孔子の儒教の独自性だといわれている<sup>4</sup>。

「父子親あり、君臣義あり、夫婦別あり、長幼序あり、朋友信あり」という言葉があるように、孔子の儒教が、社会秩序の構築と道徳の修得・血縁を重要視していた。孔子死後、前漢の武帝がそれを正統教学として樹立させ、以後、清の末まで王朝支配の体制教学、つまり皇帝を頂点とする位階制度、また、家では家父長を頂点とする上下秩序が延々と続いていた。

一方、人間の感性と知性について、孔子は感性のまま生きる（動物的）ではなく、知性をもって生きる（人間として、人間らしい）こと提唱していた。また、知性は教育によって得られ、さらに知性を磨いて徳性を持つという境地の獲得を力説していた。つまり、知化・徳化は人の手による文化であり、教化であり、礼化であると締め括る。そのため、教育の重要性、特に子供の教育の必要性を唱え、教育に力を入れ、隋唐に始まる科举制度の成立の土台を作った。中国では、孔子は「学問の神様」、「聖人」として祭られ、中国全土に建立された「孔子廟」（聖堂）内には明倫堂（学校・講堂）が備わっていた<sup>5</sup>。

## 3. 『論語』の構成とその魅力

仁政を提唱し、民を愛しむ主張を掲げた孔子は、自分の政治理念を実現させようと、14年間弟子とともに諸国を遊説したが、惜しいことに、その主張は支配者に採用されなかった。結局、故郷に戻った孔子が、教育や古典書籍の整理に専念した。孔子の死後、孔子と弟子及び弟子間の問答をまとめた『論語』には、仁政の意義及び孔子の政治や教育に関する見地が述べられ、孔子の儒教を知る基本資料となった。『論語』は「学而 第一」から「堯曰 第二十」の全二十篇で構成されているが、孔子の年代順或いはテーマに沿って体系的にまとめた書物ではなく、篇名も出だしの二文字を冠しただけであった。そのため、「学而第一」から順に読む必要はなく、パッと開いた所をどこから読んでも宜しい。これが、又、『論語』の魅力の一つとして数えられる。

## 4. 日本への伝来及びその影響

『論語』は応神天皇（5世紀前後）の代に、朝鮮半島を経由して日本に伝来したといわれている。『古事記』によると、百済から渡来した和邇（王仁）が、『論語』十巻、『千字文』一卷を応神天皇に献上したという。中国から日本に伝わった最古の書籍の一つだった『論語』が、漢字の日本での伝播に大きく寄与したといわれている。

東京都文京区湯島一丁目にある史跡の「湯島聖堂」は、江戸時代の元禄3年（1690年）、江戸幕府5代将軍徳川綱吉によって建てられたものであり、後に幕府直轄の学問所（昌平黌）と名付けら

れた。JR中央線の御茶ノ水駅聖橋口を出て、聖橋を渡り右手の森の中に、「日本の学校教育発祥の地」の掲示が見える。その建物には、1975年(昭和50年)に中華民国台北ライオンズクラブから寄贈された孔子像の他、孔子の高弟たち、四賢像(顔子、曾子、思子、孟子)が安置されている<sup>6</sup>。また、江戸時代・寛文10年(1670)岡山藩主池田光政によって岡山県備前市に創建され、岡山藩直営の日本最古の「庶民教育のための学校・学問所」である閑谷学校には、国宝の講堂、聖廟、閑谷神社などが建てられ、明治、大正、昭和とさまざまな分野で、現在の日本の歴史をかたち作る有能なリーダー達が輩出されていたと伝えられている<sup>7</sup>。さらに、明治に入ると、『論語』が、「経営指南」や「経営宝典」と称されるようになり、『論語』の伝来は、日本の社会に大きな影響をもたらしたといえよう。

### 三.『論語』から読み取れた情報

前述したように、『論語』は、孔子と弟子及び弟子間の問答を、孔子の死後、弟子たちの手によって編纂されたものになっているが、次は、孔子の発話、弟子たちの発話の数はどのようになっているかについて、考察を試みる。方法として、『論語』の巻順に従い、発話者を「孔子」と「弟子等」に分け、それぞれの発話数をまとめる形を取っている(便宜上、対話文中の漢数字をアラビア数字に置き換えている。筆者)。

#### 1. 孔子の発話・弟子たちの発話の件数

##### 巻第一

学而第一。発話数 16 件

発話者：孔子。1, 3, 5, 6, 8, 11, 14, 16。\*8 件

発話者：弟子等。2, 4, 7, 9, 10, 12, 13, 15。\*8 件

為政第二。発話数 24 件

発話者：孔子。1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 20, 21, 22, 23, 24。\*24 件

発話者：弟子等。\*0 件

##### 巻第二

八佾第三。発話数 26 件

発話者：孔子。1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 20, 22, 23, 25, 26。\*24 件

発話者：弟子等。21, 24。\*2 件

里仁第四。発話数 26 件

発話者：孔子。1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 20, 21, 22, 23, 24, 25。

\*25 件

発話者：弟子等。26。\*1 件

##### 巻第三

公治長第五。発話数 28 件

発話者：孔子。1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 16, 17, 18, 19, 20, 21, 22, 23, 24, 25, 26, 27, 28。

\*25 件

発話者：弟子等。13, 14, 15。\*3 件

雍也第六。発話数 30 件

発話者：孔子。

1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 20, 21, 22, 23, 24, 25, 26, 27, 28, 29, 30。 \*29 件  
 発話者：弟子等。9。 \*1 件

#### 卷第四

述而第七。発話数 37 件

発話者：孔子。

1, 2, 3, 5, 6, 7, 8, 10, 11, 14, 15, 16, 18, 19, 21, 22, 23, 25, 27, 28, 29, 30, 32, 33, 34, 35, 36。 \*27 件

発話者：弟子等。4, 9, 12, 13, 17, 20, 24, 26, 31, 37。 \*10 件（下線部は孔子の立ち振る舞いの紹介。以下同。筆者）

泰伯第八。発話数 21 件

発話者：孔子。1, 2, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 20, 21。 \*16 件

発話者：弟子等。3, 4, 5, 6, 7。 \*5 件

#### 卷第五

子罕第九。発話数 32 件

発話者：孔子。

2, 3, 5, 8, 9, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 20, 21, 22, 23, 24, 25, 26, 27, 28, 29, 30, 31, 32。 \*26 件

発話者：弟子等。1, 4, 6, 7, 10, 11。 \*6 件

郷党第十。発話数 23 件

発話者：孔子。12, 23。 \*2 件

発話者：弟子等。1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 20, 21, 22。 \*21 件

#### 卷第六

先進第十一。発話数 26 件

発話者：孔子。1, 2, 4, 5, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 20, 21, 22, 23, 24, 25, 26。

\*24 件

発話者：弟子等。3, 6。 \*2 件

顔淵第十二。発話数 23 件

発話者：孔子。1, 2, 3, 4, 6, 7, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 20, 21, 22, 23。 \*20 件

発話者：弟子等。5, 8, 9。 \*3 件

#### 卷第七

子路第十三。発話数 30 件

発話者：孔子。

1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 20, 21, 22, 23, 24, 25, 26, 27, 28, 29, 30。

\*30 件

発話者：弟子等。 \*0 件

憲問第十四。発話数 46 件

発話者：孔子。

1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 20, 21, 22, 23, 24, 25, 26, 27, 29, 30, 31, 32, 33, 34, 35, 36, 37, 38, 39, 41, 42, 43, 44, 45, 46。 \*44 件

発話者：弟子等。28, 40。 \*2 件

#### 卷第八

衛靈公第十五。発話数 42 件

発話者：孔子。

1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 20, 21, 22, 23, 24, 25, 26, 27, 28, 29, 30, 31, 32, 33, 34, 35, 36, 37, 38, 39, 40, 41, 42。 \*42件

発話者：弟子等。 \*0件

季氏第十六。発話数 14件

発話者：孔子。1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13。 \*13件

発話者：弟子等。14。 \*1件。

#### 卷第九

陽貨第十七。発話数 26件

発話者：孔子。1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 21, 22, 23, 24, 25, 26。

\*25件

発話者：弟子等。20。 \*1件

微子第十八。発話数 11件

発話者：孔子。1, 6, 8。 \*3件

発話者：弟子等。2, 3, 4, 5, 7, 9, 10, 11。 \*8件

#### 卷第十

子張第十九。発話数 25件

発話者：孔子。 \*0件

発話者：弟子等。

1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 20, 21, 22, 23, 24, 25。 \*25件

堯曰第二十。発話数 5件

発話者：孔子。4, 5。 \*2件

発話者：弟子等。1, 2, 3。 \*3件

集計：総発話件数合計は 511 件。孔子発話件数合計 409 件。弟子等発話件数合計 102 件。

## 2. 上記のデータ集計から読み取れる情報

- ①卷第一「為政第二」発話件数 24 件。すべて孔子が発話。
- ②卷第七「子路第十三」発話数 30 件。すべて孔子が発話。
- ③卷第八「衛靈公第十五」発話数 42 件。すべて孔子が発話。
- ④卷第十「子張第十九」発話数 25 件。すべて弟子等が発話。
- ⑤孔子が発話した場合は「子曰く（しのたまわく）」と尊敬語で記述。
- ⑥弟子が発話した場合は弟子の名前の後に「いわく」が続く。
- ⑦孔子が諸侯や君主との対話の際は、上下の立場により、氏名（孔子）のまま、「孔子曰く（こうしのたまわく）」とつづる。
- ⑧弟子の口から孔子の立ち振る舞いを述べる節が 35 件数えられる（下線部参照）。
- ⑨孔子の発話件数が 409 件数えられる。
- ⑩弟子等の発話件数が 102 件数えられる。

## 3. 『論語』から見える孔子像

孔子の生誕地である魯の国は、当時三桓氏と呼ばれる家老に権力を乗っ取られ、君主である昭公

は隣の齊国に亡命した。28才から魯に仕官している孔子が、36才の年に、昭公の後を追って齊に遊説する。37才の時、魯に帰国した孔子は、再び魯に仕官するが、55才の年に、三桓の勢力を抑えようとして失敗した。56才の年に魯を去って遊説のため、衛という国に入る。その後、「曹・宋・鄭・陳・衛・衛・陳・蔡・楚・衛を遊歴すること十四年。衛と陳に長く止まった」と、記録されている<sup>8</sup>。14年間諸国遊説の際、慕う弟子たちが孔子に付き添った。69歳の時、衛から魯に帰国した孔子は、弟子の教育に心血を注ぎ、古典書物を編纂し、儀礼や音楽についても整理を行い、魯国の記録『春秋』の編集にも関わったといわれている。『論語』巻第四「述而第七の三十七」に、「子温而厲、威而不猛、恭而安、「先生はおだやかでいてしかもきびしく、おごそかであってしかもはげしくなく、恭謙でいてしかも安らかであられる」と、述べられている<sup>9</sup>。そばにいる人に安心感を与え、しかもそれらの人を向上心に導く理想的な先生だったのであろう。

孔子は、権力や刑罰のみに頼った政治ではなく、統治者の徳治（道徳による統治）と仁政（民を慈しむ政治）を訴え、民に対しては礼の教育を通して、恥を知る社会規範の構築を唱えていた。民の暮らしを豊かにし、その後、教育によって文化的素養を高め、さらに才徳兼備の人材を政治の場で活用することを理想としていたが、その政治理想は理想のまま、実現することはなかった。しかし、「有教無類。教えありて類なし。（誰でも教育によって立派になる）」という孔子の言葉に励まれ、親は選べないが、教育により自己救済できる、いわば、科挙（試験）により、出生できるという社会の仕組みに多くの人は希望を見出していたことであろう。

#### 4. 孔子の弟子たち（四科十哲）

『論語』巻第六「先進第十一の三」に、「徳行には、顔淵、閔子騫、冉伯牛、仲弓。言語には、宰我、子貢。政事には、冉有、季路。文学には、子游、子夏。」と、述べてられている<sup>10</sup>。ただ、これは孔子の言葉としてではなく、発話者不明で記述されているが、孔子門下中の弟子10名が、その長所によって評価されていると考えられる。徳行とは、すべての行為が善いこと。言語とは、諸侯間の応対の修辭に優れること。政事とは、治国の才能があること。文学とは、古典に通暁すること。後世は、これを、「四科十哲」と称し、また、この十哲が、『論語』に繰り返し登場している。

#### 5. 『論語』に見る教育を重要視する孔子の言葉

##### 巻第四「述而第七」

二番：子曰、黙而識之、学而不厭、誨人不倦、何有於我哉、「子ののたまわく、黙してこれを識し、学びて厭わず、人を教えて倦まず。何か我れに有らんや。」「黙ってそれを覚え、学んで飽きることなく、人を教えて怠らない。（それぐらいのことは）私にとっては何でもない」という<sup>11</sup>。

##### 巻第五「郷党第十」

一番：孔子於郷党恂恂如也、似不能言者、其在宗廟朝廷、便便言唯謹爾、「孔子は、郷里では恭順なありさまで、ものいえない人のようであったが、宗廟や朝廷ではすらすらと話され、ひとすら慎重であられた」という<sup>12</sup>。

また、「郷党第十」には、発話数23件のうち、孔子の発話が2件のみとなり、弟子等による孔子への評価やその立ち振る舞いへの紹介が21件に上るといふ集計になっている。

##### 巻第八「衛霊公第十五」

一番：衛靈公問陣於孔子、孔子對曰、俎豆之事、即嘗聞之矣、軍旅之事、未之學也、明日遂行。

(衛の靈公が孔子に戦陣のことをたずねられた。孔子はお答えして「お供えの器のことなら前から聞いておりますが、軍隊のことはまだ学んでおりません。」といわれると、あくる日にすぐ〔衛の国から〕立たれた。) <sup>13</sup>という。この事例から孔子が平和主義者であることがうかがえる。

二十九番：子曰、人能弘道、非道弘人也。(先生がいわれた、「人間こそ道を広めることができるのだ。道が人間を広めるのではない。’) <sup>14</sup>という。この言葉から孔子が努力家であることがうかがえる。

三十九番：子曰、有教無類。教えありて類なし。(誰でも教育によって立派になる) <sup>15</sup>と、教育による自己救済を提唱する教育者の顔がうかがえる。

#### 卷第九「陽貨第十七」

二番：子曰、性相近、習相遠。性相近し、習い相遠し。(先生がいわれた、生まれつきは似かよっているが、しつけ(習慣や教養)でへだたる。)という<sup>16</sup>。教育による無限の可能性を信じる。

#### 四. おわりに

孔子の人生を振り返ってみると、志を立てても政治改革には挫折した一方、大勢の弟子を育て、弟子から敬愛されていたため、教育者としては幸せな人生を送ったと言えよう。世を変えるには人を育てるしかないと考える孔子が、士族階級の教養とされる礼、楽、書などを庶民に教え、弟子たちが貴族に仕え、諸国の政治を変えていくきっかけにしたいと考えたのであろう。人こそ宝という信念の上に立っている、2000年前に生まれた孔子の学問に、温かさが感じられるのは、私一人ではなかろうと考える。

もう一方、日本に伝来された後、『論語』は道徳の指南書として、社会に広く受け入れられた。また、明治・大正という激動の時代を生きる実業家の渋沢栄一が、経営者だけでなく、労働者や社会全体が等しく豊かにならない資本主義はうまくいかないと悟り、愛読書の『論語』を取り上げ、道徳と算盤(つまり、経済活動等)とは、決して対立するものではなく、この二つを両輪とすることで、経済が発展すると力説し、経済の発展から得た恵み=利益が庶民に還流できる社会の構築に力を注いだと伝えられている。

そして、時代が移り変わり、もろもろの課題を抱え込み、「ブラック企業」や「過労死」といった言葉が生まれ、従業員の利益を考えない経営者が増え、社会が行き詰っているように見えている現代社会において、それを打破するヒントが渋沢栄一の教えにあると、『論語と算盤』が再び注目され、社会の仕組みの再構築に寄与していくのであろう。また、利益ばかりを追求するあまり、拝金主義が隅々に浸透する現代中国においても、渋沢栄一の『論語と算盤』が導入され、読破されていくことを願っている次第である。

#### 参考・引用文献

- 1) 金谷治訳注『論語』岩波文庫 2006年第13刷発行
- 2) 加地伸行『儒教とは何か』中公新書 1990
- 3) 白川静『孔子伝』中央公論社 1972
- 4) 『漢語大詞典』巻一『漢語大詞典』出版社 1993

- 5) 串田久治『儒教の知恵』中公新書 2003
- 6) 湯島聖堂 - Wikipedia
- 7) 旧閑谷学校◆備前市◆庶民教育◆備前市\*旧閑谷学校 (y-daikun.net)

- 
- <sup>1</sup> 加地伸行『儒教とは何か』中公新書 1990
  - <sup>2</sup> 『漢語大詞典』巻一『漢語大詞典』出版社 1993 p 1711
  - <sup>3</sup> 加地伸行『儒教とは何か』中公新書 1990
  - <sup>4</sup> 同前掲書
  - <sup>5</sup> 白川静『孔子伝』中央公論社 1972
  - <sup>6</sup> 湯島聖堂 - Wikipedia
  - <sup>7</sup> 旧閑谷学校◆備前市◆庶民教育◆備前市\*旧閑谷学校 (y-daikun.net)
  - <sup>8</sup> 金谷治訳注『論語』「孔子略年表」 p 403 岩波文庫 2006 年第 13 刷発行
  - <sup>9</sup> 金谷治訳注『論語』 p 150 岩波文庫 2006 年第 13 刷発行
  - <sup>10</sup> 同前掲書 p128
  - <sup>11</sup> 同前掲書 p 184
  - <sup>12</sup> 同前掲書 p 184-185
  - <sup>13</sup> 同前掲書 p 303
  - <sup>14</sup> 同前掲書 p 318
  - <sup>15</sup> 同前掲書 p 322
  - <sup>16</sup> 同前掲書 p 342